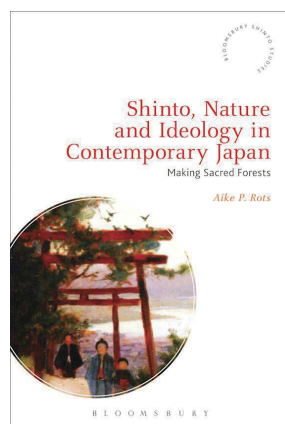


アイク・P・ロッツ

『現代日本における神道、自然とイデオロギー
——鎮守の森をつくる』Aike P. Rots, *Shinto, Nature and Ideology in Contemporary Japan: Making Sacred Forests*

全 成 坤



Bloomsbury Academic, 2017

著者、アイク・P・ロッツは、ノロウエーのオスロ大学 (University of Oslo) に勤め、アジアの宗教・文化に関する研究を行っている。特に、アジアの中でも日本に焦点を当て、研究を行っている。いわば、日本の「宗教及神道」に関する研究者であるが、『現代日本における神道、自然とイデオロギー——鎮守の森をつくる』は、既存の時代区分による時系列的な歴史に従って機械的に羅列された神道論ではない。神道そのものが形成されてきた歴史性について、そこに内在する西欧性とかアジア性、または普遍性及び日本の特殊性がどのように織り交ぜられてきたのか、ということ掘り起こし、議論を展開している。だからと言って、西欧の宗教概念に押さえ込むことなく、または、日本における神道の異質性を打ち出すこともない。言い換えると西欧の宗教理

論とか、宗教の民族主義、または宗教の政治性をも視野に入れたつも、「西欧」言説に覆われた学知的植民地の問題をも克服する理論的な試みであるように感じられる。

この著書は、全九章で組まれている。それぞれの章立ては、第一章…序文、第二章…神道の定義、第三章…自然への愛、第四章…神道環境主義パラダイム、第五章…鎮守の森、第六章…過去の風景、第七章…未来のための森、第八章…東北のドングリ、第九章…親環境化、グローバル化、結論である。具体的に内容を見ていくと、すでに述べたように、著者、アイク・P・ロッツの視点には、宗教とか神道などの分析対象を、本質的に何らかの骨格を持つていることへの疑問から出発し、その歴史性を明らかにすることから始まるのが特徴である。まず、序文を紐解いてみると、

伊勢神宮で行われたG7の象徴的意義を皮切りに、その戦略的な場所性の意義を認めつつ、伊勢神宮に対する「認識の枠組」が持つている伝統及び意識的な馴れ合いへの分析を展開している。

つまり、神道そのものの歴史性を検証し、その神道のなかに含まれている宗教政治、環境学などを明らかにし、そこから生まれた森林パラダイムの論理などをも広げていく。ここで提示しているディスプレインは、真理は自明なものではなく、真理という地位を獲得するものであり、真理として地位が獲得された以後は、理論として意義が見失われることへの自覚を訴えている。この視点に立つて、社会で生産され、疎通され、意味構造の正当化が行われ、絶えまなく再構成されつつ、言説自体が増殖及び縮小されつつ、形式化されていくものだとみなしている。それは、テキスト・脈絡・権力関係性・歴史性へ焦点を当てる根拠にもなる。

著者アイク・P・ロツツは、タラル・アサド及びサイードを学びつつ、新しく神道環境主義のパラダイムの可能性を開くために、神道そのものがどのように変化を遂げ、その内的資源から神道の変化に主体的に向き合うための森づくり及び里山づくりなどへ参与し、学習者及び行為者としての転換を試みている。では、紙面の関係上、この著書の重要な章をかいつまんで、簡単ではあるが紹介しておこう。

第二章からは、近現代まで（一八六八―今日）の神道の多様な概

念を検討している。それは、伝統的なものとして概念化される現代史の脈絡化が行われる瞬間瞬間とその再概念化のプロセスを明らかにしている。つまり、ピエール・ブルデュー (Pierre Bourdieu) の歴史的脈絡の経路を系譜的にたどる方法でもあろう。同時に〈神道学〉そのものを構成主義的にアプローチし、いわゆる中立的な定義を取る立場を取ろうとする。言い換えれば、旅行案内書とか百科事典式または大衆言説として紹介される「土着」宗教的な扱い方に対する違和感を提示している。先史時代から存在し続け、多少の変化はあったにしろ、歴史的環境に適応してきた日本文化としての、古代的な伝統としての神道描写への伝統性、それを揺さぶるのである。〈神道と日本〉へ投影している歴史的認識、つまり、その単一的で統一的なまなざしに内在する〈現在の統一性〉を同時に問題化しなければならないことである。それは、もちろん、日本の土着宗教としてみなされ、大衆化された本質主義的な観念は、創られた神道論の出現によって、両方の理論の往来が行われていることを物語っている。つまり、神道そのものの意味と定義の境界は議論の対象になり続け、どちらかの立場を正当化する政治的なことからの脱却である。これは、神道そのものの価値中立的な立場と定義の不可能性を考慮しなければならないと述べつつ、それを克服することは、神道は何を必要として来たのか、神道は何によって概念化されていたのかを問うことである

う。だからと言って、神道そのものがただ歴史的な条件によつて構成された「構築物」であるとか、シニフィアン (significant) に過ぎないということでもない。かえつて神道そのものを通して、境界化されるその背景、条件、経験、慣行などを浮かび上がらせ、むしろ社会的・文化的・政治的性質を炙り出させてくれるリトマスであらう。

とりわけ、神道の論じ方を確認するために、本居宣長及び平田篤胤など国学、そして吉田兼俱などを分析し、神の伝統性の発見及び崇拜のプロセスを明らかにしている。または、神道そのものの起源を遡ることの論理がもつ視線をヘアナクロニズム (anachronism) と表現し、そこから変化と再創造の過程を明らかにする。それで、アイク・P・ロツツは、五つのパラダイム、すなわち帝国パラダイム・民族パラダイム・地域パラダイム・普遍的パラダイム・霊的パラダイムを設定し、それらの中からどのよう概念化が行われてきたのかを提示している。もちろん、このようなパラダイムも政治的・歴史的な条件によつて発展しつつ変改してきているし、それは時期的にも一つの時代に限られるものでもなく、または、今も共存しているものであることを忘れてはいない。それらは相互補完の関係でもあり、お互い層位、矛盾、重複または結びつきも考慮されるべきであると述べている。このうち、帝国のパラダイムとは何を指すのか、一つ例として取り上げ

てみよう。明治帝国により、神道は、日本で公共のものであり、非宗教的な儀式であるとされたが、宗教の意味、つまり日本で再定義された宗教の規定設定方式と、その時に活用された宗教的範囲を検討する作業である。そのため、近代以前の日本社会を眺めつつ、宗教と世俗の間を縫う、宗教的概念として説明しようとしている。ところがそれには、天皇をめぐる非宗教的な儀式としての伝統、そこから日本の伝統性、原始的純粋性を成り立たせる概念を生み出したのである。これには、西欧宗教概念を成り立たせている信仰・救援・愛・個人利益などを具現する儀式そのものを担ぎ出して作り上げられているために、伝統とは異質のようにみえつつ、同時に、伝統宗教として成立しなおされたのである。それに加えて、著者は、日本の宗教学者である磯前順一の理論を援用し、神道が宗教ではない主張は、天皇と密接に関係している神道を、キリスト教及び仏教との競争から生まれたものとも関連付けて説明している。とりわけ、教理上の弱点を克服するために、神道教理の体系化を試みたが、それも成し遂げられなくなった。そのために、教理志向的宗教概念と神道みずからの実践志向の性格を両立させようとし、西欧宗教概念の範囲外へ神道そのものの位置替えを試みることになった、などと提示し、西欧宗教概念との混合及び分離のプロセスを説明している。その結果として、神道世俗主義が成り立つ論理へ結びつき、儀式イデオロギー体系の

完成を読み取る。神聖な国家の神聖な天皇の役割が結びつき、祖先神・お墓・祭祀などが特別な地位を獲得し、大衆の想像の中に住みついていったことを説明している。これこそが帝国主義的パラダイムであり、これは政治的な機能を失ったとしても、中身が完全になくなったことがないことを指摘している。だから神道は、日本国家の本質と結びつくのだが、これは脱領土的・脱歴史化を伴う神道をもつ日本と相関関係で成立していることを隠ぺいすることを浮かび上がらせている。

第三章では、五つのパラダイムと普遍的パラダイムの脈絡の間にグローバリズムの意味合いが内包されていることを改めて確認する。つまり神道環境主義パラダイムの一つの中心教理に焦点が当てられ、自然と環境の言説をあらためて確認し、その自然と環境がもっている世界的な言説を再確認し、そのパラダイムの要素がどのように結びつくのかを説明している。それこそが、新しい神道言説への挑戦であり、グローバリズムとの結びつきであろう。宗教環境主義の拡散は、仏教・道教・ヒンドゥー教などアジアの宗教に対する新しい解釈を生態的に持続可能にさせたのか、またはアジェンションしてきたのかを見せてくれている。それは、自然というものの解釈からはじまり、自然を人間に従属させたキリスト教的認識が、環境破壊を招いてきたことを述べたあと、自然と人間の相互依存的な観点をもっている東洋的観点をいかし、環

境破壊へ歯止めをかけるよう、自然に対する認識の変容を記述する。それには、禅仏教が人間と自然の関係においてキリスト教的認識の鏡像であるとか、西欧の人間中心主義を乗り越える方法として、禅のような代替及び全体論的な世界観を考慮することになったことを一例として把握している。ところが、このような世界観は、西欧の認識世界では理解しにくい〈文化的枝葉物〉とみなされ、西欧に広まりにくいとされる。それを乗り越えるために提示されるのが、環境の理論であり、そのためにプロト(proto)環境論を再考察し、現代的な意味として新しく置き換えている。この方法は、序章及び前章で展開した〈歴史的な文脈〉を新しく定義しなおすこと、または、その歴史化のプロセスをこまめに再検討する方法が、この章でも一貫しているといえよう。いわば、日本における自然愛という神話系譜を追跡するために、自然という概念の範疇及び理念とどう結びつくのかを検討する。つまり、自然というのは、文化概念に内在するものとして解釈され、それによつて解釈されたものであったことに気づいたところから自然とする。それはかえつて、西欧の文化概念を超えたところから自然というものを考えるように促してくれたのであり、文化としての自然解釈ではなく、自然を環境の概念へと結びつける方向性を与えてくれたのである。つまり、自然環境と絶え間なく調和しようとする思想である。そして、神道環境主義パラダイムにおいて重

要な思想的背景を和辻哲郎から導き出してくる。いわゆる「風土」である。それをもって自然に対する、既存のパラダイムの限界を批判的にとる。つまり、自然に対する解釈は東洋と西欧とも、本質的な概念世界から抜け出ず、本質的な対立関係に基づいていることが背景に存在することを指摘する。それは、ややもすると現代まで引き続いていともいえる。ここで提示している本質主義とは、東洋というものの眼差しでもあり、自然への理想などである。そのような解釈から抜け出ることなしに、公式化された神道への社会化との関係性を捉えることはできないとみている。

第四章では、神道環境保護論者の深層的な内容、またはこのパラダイムの定義の特徴を検討している。そして、日本におけるこのパラダイムの大衆化がどのように行われていたのかを検討していく。このような日本のトレンドがグローバル化とどう接続していくのかを明らかにしている。これは、神道環境主義とも結びつくものであり、神道の役割をめぐる両極化傾向が統合的に語られるよう、争点の対話可能性を考えようとする試みにつながるとみている。そして、第五章では、神道の核心的な概念の試みとして、鎮守の森について集中的に説明している。特に、鎮守の森の概念とそこに含まれている意味を明らかにする作業から始まる。森を守る神の世界とも翻訳できると表現しつつ、神道と環境をつなげる言説の重要な概念としてとらえている。それは、戦後における

鎮守の森の再発見論理を系譜的に検討している。それが環境保存とどのように結びついていったのかを、日本の学者の言葉から確認し、その後神道学者と宮司との協業の動きを視野に入れつつ、神道関連文献で使用されている鎮守の森の意味変化に逢着する。つまり、鎮守の森は、ある特定のな一つの場所及び森だけを指すのではなく、日本の共同体の生活の中心場所と呼ばれていた神聖なる空間を呼称するようになる。これは、神社本庁が「法的制度の限界を克服」することを打ち出すための公共伝説論でもあるが、それには、理念の大衆化が伴われた。または、森林研究と保存のために努めた森林研究協会の役割も大きかった。それは、神聖性を保っているときみなす古代環境認識の表れである神体など、それがアナクロニズム(anachronism)的であるにもかかわらず、西欧の森林文明論と反対の意味のユニークな森林論を導き出すことを可能にした。この分析こそ、森林崇拜の理念的構図を再構成し、鎮守の森再建活動が持つている神聖空間創造の意味合いを探し出せるのである。第六章では、やはり、神聖空間の生成過程の究明である。場所の神聖化には、禁忌及び崇拜が作動されるが、そこには神の肉体として森林の定義などが付随してくる。そのため、必ずしも神聖なる性格という実体的な経験ではない。これには、やはりエリアーデの理論などが援用された。場所の神聖化の過程は、政治的及び経済的現実と密接に結びつくものであり、所有の

概念と結びつく傾向も濃厚である点に注意を喚起させる。そして、最後に、第九章では、伊勢の森を探検する。それは、今まで展開してきたように、伊勢が歴史の中でどのように伊勢神宮へ収斂されていくのかを検証する。伊勢神宮が日本で重要な、もつとも古い神宮として知られていることを認めつつ、内宮と外宮の歴史性を説明する。中世時代の神崇拜の発展との関係及び土着、仏教以前の崇拜対象として概念化されたそのものの語りをも紹介する。それから巡礼地として大衆化されつつ、仏教またはそのほかの宗教的な礼拝要素を統合していることを検討している。

ここでは、仮ではあるが、古代神道に存在する環境的な要素も同時に入り込むのである。自然の永遠性とか生命論などが強調され、太陽または血統をも重視される天照大神の象徴性を確認し、それらと神道環境主義パラダイムの拡散を同時に考察している。伊勢が自然との調和及び共存が古代神道精神の典型として捉えなおされることへの驚きを素直に表現し、その認識の獲得の背景を探る。つまり、それは、ある種、尊敬と感謝の認識の喪失の結果として、環境の問題が道徳とか文化の世界へ縮小され、自然に対する神道の見解が、環境的变化そのものへの寄与方法を考えるべきだとみている。国際的な神道環境主義は、過去の帝国主義と分離させ、神道の環境への貢献を大衆化しようとする。それには、国際的な神道言説の脱政治化及び民族主義的なアジェンダーの隠

ぺいのための精緻なグリーンウォッシング (greenwashing) に見える恐れを指摘している。ポスターのイメージ使用方法とか、自然の描写方法などに含まれる両面性を意識すべきであろうとし、今日を見る重要なヒントを得ようとする。遠い古代を想像し膨らんでいくイメージが、世界化の再構成が必要とされる現在にアイデンティファイする際に作動する影響それ自体を考慮すべきであるとみている。相反するように見えるが、これは同時に進行されるファクターであることを考え、神道の世界化のパラダイムを考えることの意義の根源を再び考え直すべきであると、アイク・P・ロッツは、この著書で訴えているようである。